

「グローバル人材と岡倉覚三」要旨

木下 長宏

I. 岡倉は、19世紀の終りに、清(現代の中国)の奥地まで弁髪をつけて探検調査に行き、20世紀の初めにインドを訪れ、宗主国イギリスと闘う若者へ共感を寄せ、そのあとアメリカボストンへ行き、10年にわたって日本とアメリカを五回往復し、ボストン美術館中国日本部の改革と発展に貢献した。みずから美術館の収集品(ビゲロー、フェノロサ等の寄贈品)を整理する職に就いたばかりでなく、六角紫水という漆の専門家やいろんな専門家をスタッフに招んだり、また、ロンドンで画商の丁稚をしていた富田幸次郎を美術館のスタッフにするなど、人材登用の面でもグローバルな働きをした。インドの女性詩人と恋文を交換しているのも、英文著作を三冊ロンドンとニューヨークで出版したことや、セントルイス万博で講演をしたり、ボストン美術館で収集品の整理と拡大(買い付け)を進めながら、東アジアと日本の美術にまつわる講義をしたことなども、グローバル活動の一面である。表①参照。

II. 岡倉の活動と思想を考えるうえで、非常に大切なことが一つある。それは、岡倉は「岡倉覚三」と呼ぶべきであり、彼の先に挙げた活動もすべて「カクゾー」の名においてやっていたということである。「天心」という通称は、没後、再興日本美術院の人びとによって創られた呼び名で、その名前のもと、戦時下は大東亞共榮圏の先覚者として祀り上げられた。ほんらいなら、敗戦の後「天心」と呼ぶことは廃めるべきだったが、戦後の日本美術院(院展)は、「天心」という称号を伝統として遺そうとし、その呼びかたを慣習化させた(院展の人びとの歴史批判意識の欠如)。「岡倉覚三」が遺したテキストは、「岡倉天心」という眼鏡のもとで、極めて恣意的に読まれて来た。表②参照。(アメリカでは、ずっと「オカクラ・カクゾー」と呼ばれてきたが、最近日本でみんな「テンシン」と言っているので「テンシン」と呼ばなければいけないという傾向が研究者のあいだでも広がっている。問題である)

「岡倉を」「岡倉覚三」と呼ぶこと、これは、彼の思想をグローバルに考えるうえで不可欠の手続きである。

III. もう一つ、一般に岡倉といえば、「天心」神話の中軸をなす思想として「アジアは一つ」と宣言した人物と受け止められているが、これも、戦時下につくられた虚構である。岡倉は、The Ideals of the East(東洋の諸理想)という著作の冒頭に、確かに“Asia is one.”と書き付けた。しかし、その前にも、その後も、この言葉を言表したことはない。もちろん、日本語で「アジアは一つ」などとは言わなかったし、書きもしなかった。それどころか、この英文著述を翻訳して日本で出版したいという申し出があったときには、あの本はインド滞在中に急いで書いたもので納得できないところがあるから、と断っている。「アジアは一つ」を「岡倉天心」の中心思想としたのは、戦時下の日本帝国主義者(とそれに唱和した人たち)だったのである。岡倉覚三が「アジア」をどう位置づけていたか、それは、彼の生涯にわたる著述と思索から再検討する必要がある。

IV. その一つを、ここで提起しておく。それは、彼の美術史の考えのなかに読みとれるものである。岡倉は、「日本」美術史は「アジア」美術史のなかで記述されなければならない、「アジア」から分離した「日本美術史」は考えられない、と考えていた。東京美術学校の講義でも「日本美術史」というタイトルは立てていない。このタイトルも、彼の没後、全集を編纂するとき編集者が付けたタイトルで、岡倉自身は「東洋美術史」という呼びかたをしていた。現在は「日本」をすっぱり抜け落した「東洋美術史」が流通しているが、岡倉は、それはありえないと考えていた。「日本」の「美」の歴史を考えれば、その源流の「アジア」とのつながりに目を配りそれを記述しなければいけない、その全体の流れのなかでこそ、「美」の本質が見通せるという考えだった。これは、つねに「世界」の拡がりのなかで、「自分」と自分に関わる状況を理解して行こうとする態度(思想)であり、ナショナルなものを排他的に擁護するのとは正反対の姿勢である。彼は美術史を考えるときこの姿勢を生涯貫いていた。表③参照。この考えかたが、彼の「グローバル」な活動の根拠になっている。

V. 岡倉の最後の著作 The Book of Tea(茶の本)でも、西洋と東洋の文化の対立と相違をしばしば強調しているが、よく読むと、彼自身は「西洋」にも「東洋」にも組みしていない。もちろん「日本」や「東洋」を「われわれ」と呼んで

いるが、国粹主義でも西洋崇拜一辺倒でもない位置から「世界」を觀ようとしている。「茶」の根本精神は、禪と道教にあり、それは、「世界」を「相対化」することである、と言い切っている。これは、やはり、幼いころから身につけていた英語力（それを活かした欧文図書の読書）、豊富な中国の書籍（漢籍）の読書経験と、じっさいに中国の土地を踏破し、またインドで一年を暮した経験が、「世界」を「相対化」して觀る視点を、彼のなかで育てていたからだろう。

① 岡倉覺三のグローバルな活動 略年表

文久二 (1863)	2. 14	横浜本町五丁目 (現 1 丁目) に生まれる。
明治19 (1886)	10. 2~明治20 (1887)	. 10. 17 欧米各国美術事情視察旅行。
明治20 (1887)	10. 14	東京美術学校幹事。美術学校第一回入学試験は明治21 (1888) 12. 24。
明治22 (1889)	5. 16	帝国博物館開設、その理事・美術部長。
明治23 (1890)	6. 27	東京美術学校校長心得。
	9~	東洋美術史、泰西美術史など講義。
明治24 (1891)		「日本美術史綱」の計画。
明治25 (1892)	5	シカゴ万博事務局監査官。
明治26 (1893)	5	The HO-O-DEN 執筆。
	7. 11	清国旅行へ出発→12. 6 神戸に帰港。
明治29 (1896)	11	パリ万国臨時博覧会事務局評議員。
明治30 (1897)	9.	パリ万博に出品する「日本美術史」の編纂主任。
明治31 (1898)	3. 17	帝国博物館理事美術部長辞職願。
	3. 26	東京美術学校校長辞表提出。
	7. 1	日本美術院創立。
明治34 (1901)	11. 21	インドへ旅立つ→明治35 (1902) 10. 6 神戸に帰港。
明治36 (1903)	春	The Ideals of the East 刊行
明治37 (1904)	2. 10	横山大観、菱田春草、六角紫水を連れてアメリカへ。
	4. 9	ニューヨークで大観・春草・紫水展。(第Ⅰ次アメリカ滞在約一年間)
	3. 25	ボストン美術館勤務。5. 紫水をボストン美術館に推薦。
	9. 24	セントルイス万博で Modern Problems in Painting を講演。
	11	The Awakening of Japan.
	12	岡部覚弥をボストン美術館に推薦。
明治38 (1905)	2. 26	ボストンを離れ、3. 26 帰国。10. 6 ボストンへ。(第Ⅱ次滞在)
明治39 (1906)	3. 12	ボストンを離れ 4. 6 帰国。5. The Book of Tea 10. 8 清国へ。
明治40 (1907)	2.	清国より帰る。11. 16 ボストンへ、12. 7ボストン着(第Ⅲ次滞在)
明治41 (1908)	4. 29	ヨーロッパ経由で帰国の途。7. 10 門司港着。
		この年富田幸次郎をボストン美術館に紹介。
明治42 (1909)	2. 8	新納忠之介をボストンに派遣。
		この年『国宝帖』英文篇。
明治43 (1910)	4. 19~6. 21	東京帝国大学で「泰東巧藝史」講義。5 ボストン美術館中国日本部長。9. 14 ボストンへ。10. 14着。(第Ⅳ次滞在十ヵ月)
明治44 (1911)	1. 17~2. 23	ヨーロッパ出張。
	4	Nature & Value of Eastern Connoisseurship. Religions in Eastern Asiatic Art.
	5	Nature in East Asiatic Painting.
	4. 21	早崎便吉、新納忠之介、中川忠順に中国日本部アドバイザーを依頼。6 ハーヴァード大学より文学博士号。8. 12 ボストンを発って
	8. 26	帰国。
明治45/大正元 (1912)	5. 5	中国へ 6. 7 帰国。8. 14 インド、ヨーロッパ経由でボストンへ。
	11. 8	ボストン着。(第Ⅴ次滞在四ヵ月余)
大正 2 (1913)	3. 19	帰国へ。4. 11 横浜着。9. 2死去。

② 「天心」という称号は岡倉覺三没後つけられた

「天心」号使用例略年表

大正2 (1913)	9.5 東京谷中斎場での葬儀に「釈天心」。8.13日付讀賣新聞見出しは「岡倉覺三氏危篤」。9.10讀賣新聞見出し「天心居士葬儀」。11.8東京美術学校追悼式「釈天心」
大正3 (1914)	3. 赤倉に「天心岡倉先生終焉之地」碑。 9.2 再興日本美術院開院、「天心靈社」設置。
大正11 (1922)	9. 『天心全集』刊行。
昭和4 (1929)	村岡博訳『茶の本』（岡倉覺三著）岩波文庫
昭和6 (1931)	12.6 東京美術学校前庭に「岡倉天心銅像」（平櫛田中作）。祠の背面に「Asia is One.」（典拠としたThe Ideals of the East. では“Asia is one”）。 11. 岡倉由三郎「茶のこゝろ一天心のこと」（茶道月報251号）。
昭和7 (1932)	清見睦郎「大アジア主義者岡倉天心」（公論5-8）。
昭和8 (1933)	岡倉一雄「天心漁譜」（朝日新聞8.9）。
昭和9 (1934)	10. 清見睦郎『岡倉天心』（平凡社）〔最初の岡倉伝〕。 『岡倉天心全集』全三巻聖文閣。
昭和13 (1938)	『新日本』二月号特集「日本の自覚・先覚者岡倉天心」（浅野晃、保田与重郎、岡倉一雄他）。遺品ノートを『理想の再建』と名付け刊行（河出書房）。
昭和14 (1939)	同上訳書を『東洋の覚醒』と改題（浅野晃訳）。『岡倉天心全集決定版』第二巻（六芸社）に収録。翌年英文版 The Awakening of the East と題名を創作、刊行。岡倉一雄『父天心』聖文閣。
昭和17 (1942)	京日々新聞6.14）。保田与重郎『日本語録』（新潮社）に「アジアは一つ」。
昭和18 (1943)	富田常雄『亜細亜は一なり』春江堂。11. 内務省情報局『アジアは一つ』（大東亜会議演説集）。『岡倉天心全集』創元社刊行開始（6、2巻のみ）。
昭和19 (1944)	日本文学報国会『定本国民座右銘』（朝日新聞社）に「アジアは一つ」。
昭和21 (1946)	3. 塩田力蔵「天心先生を中心として」（古美術）。
昭和22 (1947)	7. 林文雄「岡倉天心への批判」（芸術研究）
昭和23 (1948)	河北倫明「岡倉天心と現代日本画」（現代日本画論）。土方定一「偉大なる美術史家岡倉天心」（国立博物館ニュース16）。
昭和31 (1956)	宮川寅雄『岡倉天心』東京大学出版会。
昭和33 (1958)	「横浜開港百年記念一天心・大観・観山遺品展」横浜松坂屋。
昭和34 (1959)	「岡倉天心生誕記念碑」（横浜市中区・横浜開港記念館）。
昭和37 (1962)	「岡倉天心生誕百年」展、上野松坂屋、東京芸術大学付属図書館。
昭和42 (1967)	茨城大学五浦天心研究所「天心記念館」開館。

③ 岡倉の構想した日本美術史時代区分（A, C, D, E）と官製時代区分（B） 「世界」の中の「アジア」、「アジア」の中の「日本」その中で生きる「個」という視点

A 「日本美術史綱」1891年 岡倉が若い頃構想した時代区分

第一章	上代
第二章	推古時代
第三章	天智時代
第四章	天平時代
第五章	弘仁時代
第六章	藤原時代
第七章	鎌倉時代
第八章	足利時代
第九章	豊臣時代
第十章	寛永時代
第十一章	寛政時代

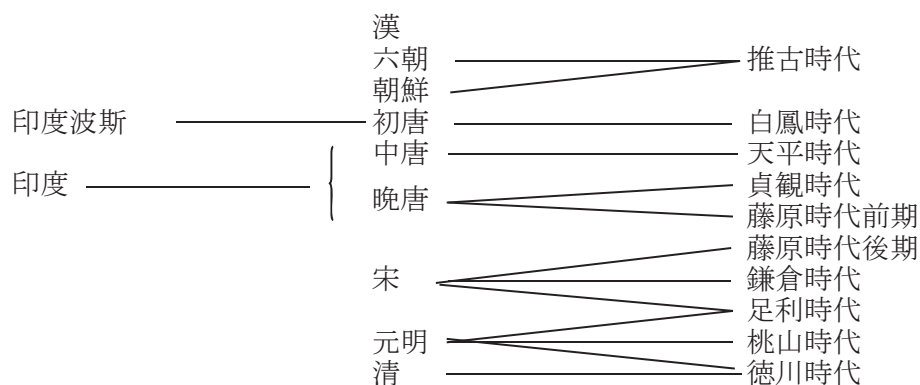
B 『稿本日本帝国美術略史』1901年（帝国博物館）の目次、明治政府公認の時代区分

第一編	国初より聖武天皇時代に至るまでの美術の変遷
	第一章 初期の美術
	第二章 推古天皇時代
	第三章 天智天皇時代
	第四章 聖武天皇時代
第二編	桓武天皇時代より鎌倉時代に至るまでの美術の変遷
	第一章 桓武天皇時代
	第二章 藤原摂関時代
	第三章 鎌倉幕府時代
第三編	足利氏幕政時代より徳川氏時代に至るまでの美術の変遷
	第一章 足利氏幕政時代
	第二章 豊臣氏関白時代
	第三章 徳川氏幕政時代

C The Ideals of the East 1902年 より

日本の原始美術
 儒教—北方中国
 老子教と道教—南方中国
 仏教とインド美術
 飛鳥時代（550～700年）
 奈良時代（700～800年）
 平安時代（800～900年）
 藤原時代（900～1200年A. D.）
 鎌倉時代（1200～1400年A. D.）
 足利時代（1400～1600年A. D.）
 豊臣時代と徳川時代初期（1600～1700年A. D.）
 徳川時代後期（1700から1850年A. D.）
 明治時代（1850年から現在）

D 『国宝帖 Japanese Temples and their Treasures.』1910年
 岡倉が考えていた時代区分とアジアの関係



E 「泰東巧藝史」1910年、岡倉が晩年構想した時代区分
アジアの中の日本美術の位置づけをめざして。

緒論（「東洋」とは異なる範囲＝「泰東」、「工芸」「美術」を区別し
ない 「巧藝」概念の提唱）

古代藝術 周・漢

六朝、三韓、飛鳥朝

唐、奈良朝（仏教的巧藝前期） 日本、朝鮮

晩唐、五代、北宋（仏教的巧藝後期その一）

平安期（仏教的巧藝後期その二） 貞観、藤原初期、中期、後期

唐、奈良朝以後（世間的巧藝）

唐、宋、元、鎌倉前期、明、清、足利、桃山、徳川

現代